

# 養成校におけるピアノ指導

— 読譜力向上をめざして —

澁谷 由美, 森田 千智\*  
愛知学泉大学

## A Study on the Instruction in Piano-playing in Nursery School and Kindergarten Teachers Training Course

— Follow-up on Improvement of Reading Music —

Yumi Shibuya, Chisato Morita

キーワード：ピアノ Piano、譜読み Reading Music、音符カード Musical Note Card

### 1. はじめに

保育者や小学校教員を目指す学生にとって、鍵盤楽器の演奏技能の習得（以下、ピアノ習得）は欠かせないものの一つである。本学の保育者・教員養成課程においても1,2年の2年間でピアノ演奏の基礎的技術と知識を習得できるようカリキュラムを組んでいる。

本学の保育者・教員養成課程に入学してくる学生は、大学入学と同時にピアノ習得をスタートさせる学生も多く、4年の就学期間のうち、およそ2年間で保育や教育現場で活用できるような知識と技術を身につけなければならない。そのような中で、いかに効率良く指導していくかが我々指導者の課題である。

さて、このような状況下でのピアノ習得で最初に大きな課題となるのは「譜読み」である。楽譜を見て音程・旋律・リズムなどを理解し、演奏する動作に変換する作業である「譜読み」は、ピアノ習得の経験者でさえも苦手とする者が多い。本学において「譜読み」をストレスに感じている学生は多く、「譜読み」が苦手なためにピアノ習得への意欲を低下させている学生もいる。

効率的な指導法を実現するためには、この「譜読み」の問題解決が避けては通れないと言えるだろう。そしてこの問題には、その「速さ」が重要な鍵を握

ると考えた。一つひとつの音やリズムを数えていたのでは「譜読み」ができるとは言えない。瞬時に個々の音程やリズムなどを判別し演奏できることが「譜読み」ができるということになる。読譜視線分析による記述の検証可能性について予備実験を行なった藤間氏らは「初心者やあまり経験や知識のない人の場合、音階や音の検索過程において、適切に検索することに時間がかかるために読譜や理解が遅れるものだと思われる。」<sup>1)</sup>と結論づけている。本学でも、ひとつの音名を答えるのに五線上の線と間をたどりながら「ド・レ・ミ…」と教え、判別に至る学生の姿をよく目にする。すなわち、楽譜に書いてある様々な要素を瞬時に判別できることこそ「譜読み」の問題解決につながると言えるだろう。

本研究では、楽譜にある様々な要素の中から、音名の判別に特化し、音名が即座に分かるようになるための方法として音符カードを使ったトレーニングを検討した。また、「譜読み」の能力向上が学習意欲の向上へと繋がると考え、前期終了後にアンケートを行い、トレーニングによる音名判別速度への効果や、その判別が「譜読み」へと移行されるか否かの効果に対する学生自身の意識の変化も調査した。

このたびの調査の一部は、各学生のトレーニングを兼ねている。すなわち、「トレーニング」を重ねることによって学生の「譜読み」向上の一助となることを期待して行った「調査」なのである（注1）。

\*愛知学泉大学非常勤講師

## 2. 調査の概要

本学では、保育者及び教員を目指す学生に対して3年間にわたり音楽に関する学びが準備されている。1年時の前期・後期に展開される演習「こども音楽Ⅰ」「こども音楽Ⅱ」の受講で、ピアノ習得を含めた音楽の基礎的な知識や技術を修得させる。2年時の「こども音楽Ⅲ」「こども音楽Ⅳ」(同、前期・後期)は、それらを受けて引き続き更なる知識の獲得・技能向上を目的としたものである。

### (1) 調査の対象と方法

本研究では、本学家政学部こどもの生活専攻の学生の内、「こども音楽Ⅲ」を受講する2年生を対象に音符カードを用いて調査した。

各学年は2クラス(AB)に分けられており、基本的に音楽に関する授業は2クラスを同時に展開している。しかし、受講者の人数と講師の人数、また授業を行う環境の都合上、今回の調査はABの2クラスをさらに半数に分けた状態(A:a+a', B:b+b')で行った。したがって、授業展開の状況によっては学年全員に行う同一の調査が2週にわたってはじめて完遂する場合がある。

調査は、カードに描かれた楽典の基礎知識((3)に詳述)によるトレーニングを行い、そのタイムならびに正誤を記録した。調査には、当該授業でピアノ指導を担当する指導者に協力を依頼した。なお、調査日によって指導者の人数が異なり、4~6名の指導者が調査にあたった。また、対象となる学生も、毎回一律ではなく、各回毎に人数にばらつきがある。さらに、調査を実施する際の指導者と調査対象者も、固定しておらず、毎回ランダムにローテーションして行った。

トレーニングは、ピアノの個人レッスンの始めに数分~数十分の時間を割いて行なった。また、トレーニングに対する学生の意識を探るためにアンケート調査を行った。アンケート調査は、都合によりトレーニングの最後を待って行うことができなかつたため、アンケート実施日はトレーニング実施日と前後していることを断っておく。

なお、カードは各指導者にレッスンのたびに渡し、調査を依頼、授業後は回収したため、学生が授業時間外にカードを用いて自習することはできない状況

にある。

### 1) 対象学生

愛知学泉大学家政学部こどもの生活専攻2年生に所属する69名

(A:a16名、a'18名、B:b17名、b'18名)

### 2) 対象授業名

こども音楽Ⅲ

### 3) 調査期間

前期期間(2015年4月7日~7月21日)

### 4) 調査日①: トレーニング実施日

第1回目 4月14日(a', b')、4月21日(a, b)

第2回目 4月28日(a', b')、5月12日(a, b)

第3回目 5月19日(a', b')、5月26日(a, b)

第4回目 6月2日(a, a', b, b')

第5回目 6月9日(a, a', b, b')

第6回目 6月16日(a', b')、6月23日(a, b)

第7回目(最終回) 6月30日(a, a', b, b')

### 5) 調査日②: アンケート実施日

6月16日(a, b)、23日(a', b')

### (2) 事前調査ならびに学生の実態

本研究で行う調査に際し、調査対象の学生に音楽歴に関する事前調査を行った(回答:63/69名)。それによると、ピアノもしくは電子ピアノ学習を大学入学前に経験している者は29名(46%)、未経験者は34名(54%)であった。ただし、学習未経験者の中には吹奏学部や合唱部に属していた者も含まれており、彼らは楽譜に接していたと考えられる。楽譜に接する機会の有・無で分類してみると、楽譜学習経験者36名(57%)、未経験者27名(43%)という結果であった。

本学学生の授業内におけるピアノ指導では、全体的に真面目に取り組む学生が多いといえる。ただし、個人レッスン時には「(譜読みができず)分かりませんでした。」といった発言と共に1曲も練習をしない状態でレッスンに臨んだり、「左手が分かりませんでした。」などと言って、聞いたことのある右手部分のメロディは練習してあるものの、ヘ音記号上の音は一音も取り組めないままレッスンに来る学生もいる。また、曲を覚えて弾いてくる学生に対して曲の途中から弾かせてみると、指示した部分を弾くことができないなど、譜読みとピアノ演奏との乖離が見受けられる。これらの学生は、一音一音数えて音を判別するため、譜読みに時間を要する学生が多

い。特にへ音記号上の音の判別には、より一層の時間を要し、苦手意識に拍車をかける。学生全般に、比較的真面目ではあるが、ピアノ習得に積極的とは言いがたい状況である。

### (3) トレーニングならびに調査の内容

本研究で使用した音符カードは、バスティンのフラッシュカードを参考にして、1枚がおよそ縦11.5cm 横7.5cmの大きさで作成した。音符カードと称しているが、音符のみではなく、一枚毎に異なる音符もしくは記号が書かれているものを準備している。音符はト音記号及びへ音記号上の音符を中心に、頻出する音符を選んだ。同じように、記号も又よく使われるものを選んだ。音符カードは、ト音記号上の音符（ロから2点トまで）を13枚、へ音記号上の音符（へから1点ハまで）を12枚、以上の音符に記号7枚を加えた全32枚。カードに記載した音符と記号は図1に示す通りである。

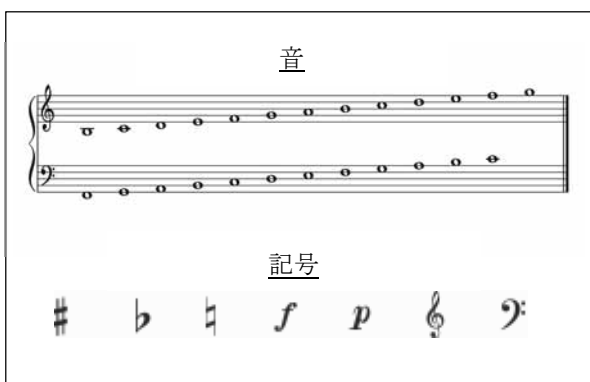


図1 音符カードに記載した音と記号

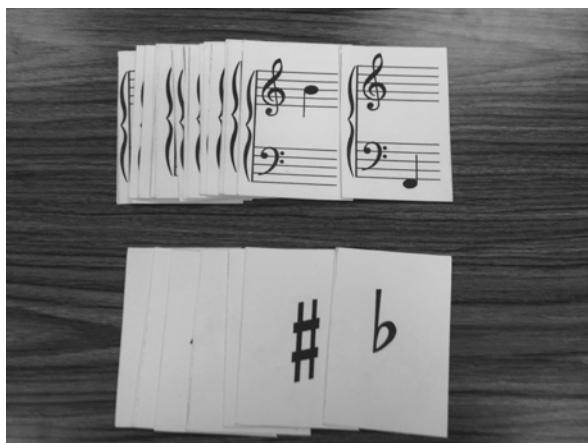


写真1 実際に使用した音符カード

トレーニングは、各指導者が担当する学生に対して次のように行った。

まず指導者が音符カードを重ね、学生が一番上に出ているカードに書かれた音名または記号に関して答える。音名はドレミ〜で答え<sup>(注2)</sup>、記号は名前と意味を言う。順次カードをめくり、次のカードの音名または記号に関して答えていく。この要領で、全32枚のカードについて繰り返す。

各指導者には、第1回目と第7回目は回答の正誤ならびにタイムの記録を、第2～6回目は、学生の間違いに対して、その都度指導を行ってもらうよう依頼した。よって第2～6回目は回答の正誤は記録せず、タイムのみ記録する。その際のタイムは、学生への指導時間も含んでいる。

タイムの計測方法は、学生が一枚目のカードを見た時に測り始め、一番最後のカードを答えたら終わりとした。すなわち、第2～6回目のタイムには、学生が間違えた際の指導時間も含んでいる。

全7回のトレーニングを重ね、その効果のほどを比較するため、第1回目と第7回目はカードの並び順を揃え、同一条件のもとで行った。第2～6回目は、それぞれの指導者がカードをランダムに重ねて、各回ごとに間違いがあれば指導して、すべてのカードについて答え終わるまでのタイムを記録した。

なお、第1回目で全てのカードに対して正解し、且つ1分以内のタイムで答えた学生は、トレーニングの対象外としている。それらの学生に対しては、瞬時に音程を判別できる者と判断し、第2～6回目の測定は行わず、第1回目と第7回目のみ測定し、そのタイムを記録した。

### (4) アンケート内容：質問ならびに回答

音符カードに関するアンケートは次のような内容と項目で質問紙により行なった。

#### 1) 質問項目

- ① トレーニングをやってみて、これまで分からなかったり曖昧だったりした音や記号が分かるようになりましたか？
- ② トレーニングにより、譜読みのスピードは速くなったと思いますか？
- ③ トレーニングにより、譜読みのストレスは軽くなりましたか？
- ④ トレーニングをやってみてどうでしたか？感想や気づいたことなどを教えて下さい。

## 2) 回答について

- ・質問①、②、③は次からの五択形式。  
(なった／まあまあなった／どちらとも言えない  
／あまりならない／ならない)
- ・質問④は自由記述形式。

## 3) 質問の狙い

それぞれ、各項目に対する学生の意識調査

- ①トレーニングの効果に対する実感
- ②トレーニングによる「譜読み」に対する効果
- ③トレーニングによるストレス軽減の有無
- ④トレーニングの有効性に関する実感

## 3. 結果と考察

今回、音符カードによるトレーニングの第1回目と第7回目のタイムを比較すると、記録を録ることのできた59名中52名の学生が初回に比べ音名の判断に要する時間が短くなっている(表1参照)。記録上、最も顕著な変化は2/5まで時間を短縮できた学生である(1/52名)。判別に要する時間を半分まで縮めることのできた学生は、上記の1名を含め6名いた。

その6名のうち、第2～6回目の記録がとれた5名について調査を追ってみたものが図2の黒い(濃い)マーキングである。順調にトレーニングの効果があらわれるのであれば、回を重ねるごとに右肩下がりになるはずであるが、決してそのようなグラフにはなっていない。また、この現象は、他の学生(図2のグラフ全体)にも見受けられ、グラフは右肩下がりがどこか、激しく上下に折れている。

表1の数字は、多くの学生が判別時間を縮めていることを示しているが、先述した通り、第2～6回目には指導者による指導時間が加わっている。順調な右肩下がりを示さない理由のひとつに、指導者による指導時間の差異がある。学生の間違いに対する各指導者の指導には、一切指示をおこなわなかった。つまり、各指導者がおもいおもいに学生に対して指導を行い、その指導が加わりながらトレーニングは進む。

正解率においては、全ての音名・記号の正解率が上がり、全て95%以上の正解率になっている(図3～5参照)。

表1からは音名判別が、よりスピーディーになったことが、また、図3～5からは音名判別が、より正

確になったことが確認される。これらのことから、第1回目の時よりも、スピーディー且つ正確な音名

表1 音符カードトレーニングのタイム比較(第1回目と第7回目)

## a クラス

名前	1回目 (秒)	7回目 (秒)
1	108	92
2	152	75
3	134	80
4	150	108
5	188	112
6	90	55
7	63	40
8	76	64
9	80	73
10	60	57
11	103	57

## a'クラス

名前	1回目 (秒)	7回目 (秒)
1	86	60
2	138	103
3	112	81
4	175	255
5	45	32
6	133	88
7	34	48
8	77	44
9	181	118
10	134	79
11	176	112
12	148	79
13	90	74
14	93	72
15	145	66
16	105	60

## bクラス

名前	1回目 (秒)	7回目 (秒)
1	54	60
2	271	97
3	51	30
4	64	54
5	43	60
6	67	62
7	55	42
8	77	48
9	99	50
10	112	55
11	157	50
12	85	55
13	69	71
14	51	35
15	87	66
16	88	72
17	100	87

## b'クラス

名前	1回目 (秒)	7回目 (秒)
1	79	50
2	111	100
3	62	43
4	98	68
5	140	87
6	235	112
7	150	114
8	40	35
9	110	61
10	67	76
11	133	149
12	151	85
13	91	59
14	166	120
15	144	95

判別ができるようになったとすることができる。これらは、トレーニングを重ねた結果、9割近くの学生がこれまでよりも音名ならびに記号を素早く且つ正確に判別することができるようになったことを示しており、トレーニングの効果が大きかったと言えよう。特に記号に関して、調査開始時の理解度の低さも手伝いその変化は顕著である。いずれの正解率上昇も、トレーニングを積み重ねることに加え、指導者による個々に即した指導が功を奏した結果といえる。

ここで、その指導についてふれておく。すべての指導者が共通して行ったことは、第2～6回目のトレーニング実施の際に、学生が音名や示した記号に関して誤った認識をしていたならば、その場で指摘して正しい答えを共に確認し合ったことである。ただし、指導者によって指摘の仕方や正解の確認の仕方に違いがある。例えば、ある指導者は、指導者自らがひとつの音を指定して、その音の位置と音名は覚えるように助言した。別の指導者は、学生本人にルールや約束事を作るように助言するなど、それぞれの指導者によって助言も異なる。また、指導者によっては、学生から正解が発せられるまで辛抱強く待つ者もあれば、ひとまず正解を導きだした後に、なぜそうなるかをピアノレッスンのおりに復習させるなど、カードを用いた（ゲームのようなトレーニングの）後も継続される場合もある。また、第1回

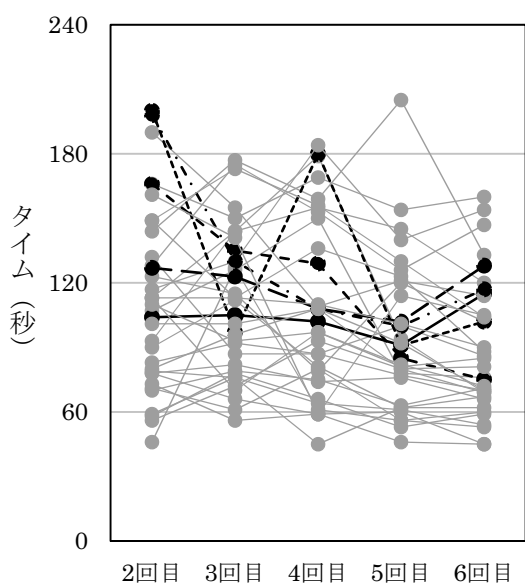


図2 トレーニングによるタイムの変化

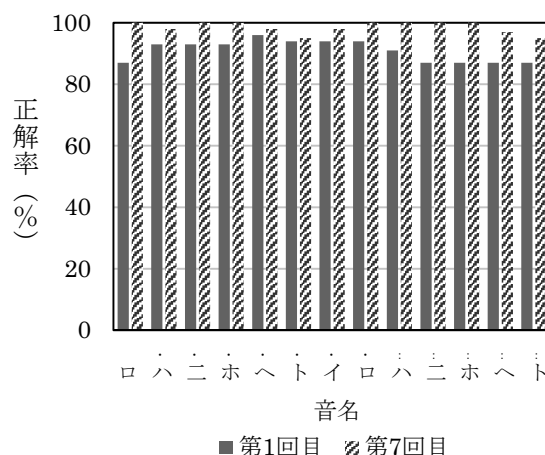


図3 音名（高音部記号上）の正解率

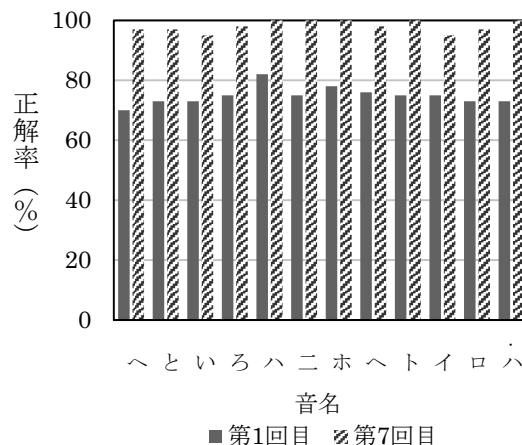


図4 音名（低音部記号上）の正解率

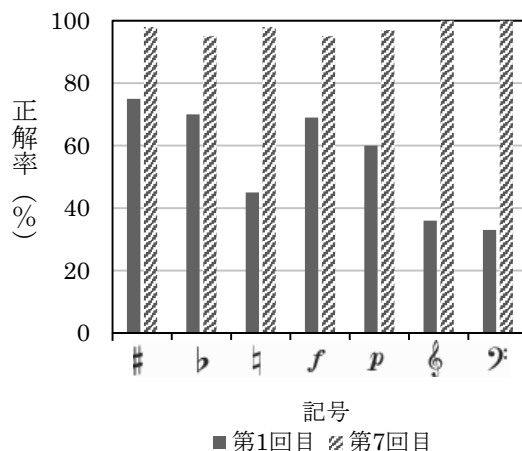


図5 記号の正解率

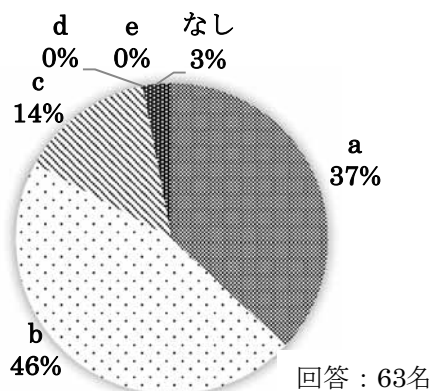


図6 質問① 音や記号の理解

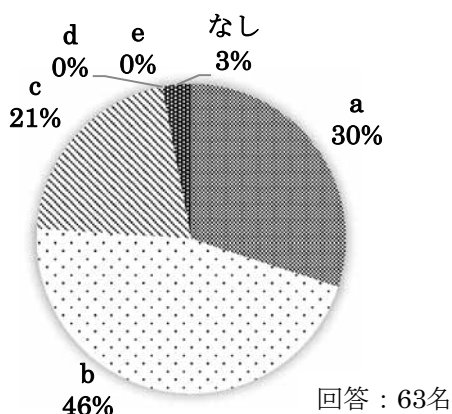


図7 質問② 譜読みのスピード

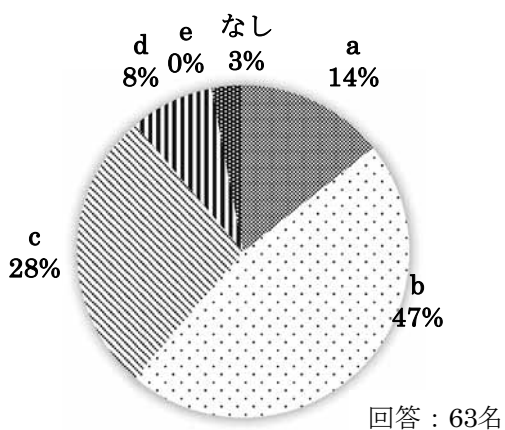


図8 質問③ 譜読みのストレス

(a なった b まあまあなった c どちらとも言えない d あまりならない e ならない)

目の調査で学生の惨状を案じた者は、カードによる調査前に鍵盤上で高音部・低音部などを確認・指導したようである。

以上のような「指導」が図3～5に見られる正解率の向上に寄与していることも事実であろう。

次に、アンケートについて考察する。アンケートは、今回のトレーニングに対する学生の意識変化を調査したものである。質問①では、音や記号の理解面から、トレーニングの効果を学生自身がどのように感じているか、すなわち、効果に対する学生の実感を調査している。

トレーニング前と比し、音や記号の理解が進んだと実感している学生は8割以上にのぼり(図6:a+b)、譜読みへの効果はさておき、基礎的な楽典の理解は若干進んだといえるだろう。これは、曖昧なまま学習していた音の読み方を、今一度学習し直す機会となったという点において、今回試みたトレーニングは有効であったといえよう。その理解を手助けしたのが、指導者による個別の指導である。

譜読みのスピードが早くなったと実感できている学生は7割以上おり(図7:a+b)、額面通りと捉えるならば、トレーニングの効果のあらわれともいえる。しかし、効果を感じている学生(76%)と音名判別の正解率の数字(図5:95%以上)には開きがあり、およそ2割もの乖離を考えると、音名や記号が分かるようになったものの、「譜読み」が速くなったという実感を伴ったものではないことがわかる。

一方、譜読みに対するストレスは、6割以上の学生が減ったと感じている(図8:a+b)。この結果のみではトレーニングの効果を明言することはできないが、半数以上の学生が譜読みのストレス軽減を感じたのであれば、意義深い結果といえる。今後のピアノ指導に期待が持てそうである。しかし3割近い学生が「どちらともいえない」と答えており、ストレスの増減を感じなかったようである。一連の調査ならびにトレーニングが、3割もの学生に何の影響も与えなかったのであれば、学校教育という公な中で行う調査という意味合いから、再考の必要性を感じる。

以上に五択形式のアンケート分析を考察したが、①～③いずれの数字からもうかがえる好結果な学生の変化や実感は、指導者にはさほど感じられるものではなかったようである(後日指導者談)。これは、学生の実感とは別の次元で、トレーニングによる音

名判別が、実際の演奏時に「譜読み」として機能していないということでもある。今後も継続したトレーニングで、実際の「譜読み」への効果をみていく必要がある。

その他、トレーニングの有効性を自由記述により調査した。トレーニングによる効果を「楽しい」と表現している学生が多い一方、トレーニング自体にストレスを感じていた学生もあり、トレーニングをする時の状況にも配慮する必要を感じた。また、「コツがつかめた」「基準となる音を覚えた」などの記述からは、指導者による個々に即した指導が、音名判別の速度変化に重要な役割を果たしていたことが裏づけられる。

自由記述に関して一部を以下に示す。

- ・ 最初全く読むことはできなかったが、コツを教えてもらい少しは分かるようになり、速く読めるようになった。
- ・ ドレミで書かなくても少し弾けるようになった。
- ・ 前までは一つ一つ数えていたので時間がかかったけれど、コツをつかんで、「目印となる音」を覚えて少し速く読めるようになった。
- ・ 積み重ねていくと、突然できる日がある。
- ・ 分かるようになるとちょっと楽しかった。
- ・ へ音記号が苦手なので難しかったけど、前より読むスピードが速くなったので良かった。
- ・ ぱっとみて読めるようにはななかったけど、楽譜を見て弾きながらは変化が感じられない。
- ・ 今まで音楽経験が全くなかったので譜読みなどに少しストレスを感じていたが、少し読めるようになり楽しくなった。
- ・ 回数が少なかったため、その日その日の調子による変化のような気がした。
- ・ 楽譜に何も書かなくても分かるようになりました。
- ・ タイムがあってあせってしまい、ミスも多かった。
- ・ 次の時に前回よりも良いタイムになればいいなと思いつつできたので楽しかった。

#### 4. まとめ

ピアノを弾くということは、楽譜を見てその内容を理解し、そしてその情報を動作に変換することである。本研究では、楽譜に示された内容の中でも音

名判別に焦点をあて、それをより速くするための指導法を探った。音符カードによるトレーニングは、半期という短い期間で効果が出たとは断言し難いが、その兆しは確認できた。しかし「譜読み」への効果ははっきりとしなかった。若干ではあるが効果が確認できたため、今回行ったトレーニングがまったく「譜読み」に直結し得ないとは考えにくい。よって、今回の結果だけでは断言できない理由として想定されるのは次の2点である。①トレーニング期間が短く、スムーズな「譜読み」に至るほどの音名判別の速度に達していない。②音名判別以外の「譜読み」に必要な要素が足りず、「譜読み」に対するはっきりとした効果が得られない。

①については効率的な指導法を考えるに当たって、「譜読み」で効果を感じる音名判別速度、及びその速度に達するまでのトレーニング期間を今後追求する必要があるだろう。また、②の「譜読み」のための音名判別以外の要素に関しては、リズムの認識・判別やそれらのグループ化が考えられる。これに関しては、後述する「周辺視」を参考に研究を進めていきたい。筆者自身、楽譜を読む時一つひとつの音を瞬時に判断すると共に、いくつかの音をグループとしてとらえ弾いている。初見演奏に必要な特徴の一つとして「周辺視」というものがあり、読譜の際わずかな間に楽譜上にある1ヶ所に目の焦点を合わせ、その間に周りにはある音符を一気に把握しているという。今後、参考にしつつ研究を進めたい。

「譜読み」のために有効であろう音名判別以外の要素として、次の事柄もあげられる。楽譜の内容を認識・判断する脳とそれらを弾く身体とを繋いでいる部分の反応速度の問題である。これに関しては、「楽譜を読めるようになると、脳は音符に対応した指を自動的にイメージできるようになる」<sup>2)</sup>「楽譜を見ているだけで身体を動かす脳の回路が働く」<sup>3)</sup>など興味深い記述がある。これらは、楽譜の内容が瞬時に分かるだけでなく、その情報を瞬時に弾くという動作に変換できなければならないということであろう。つまり、音をみて瞬時にその音を弾く事ができる能力をトレーニングすることが「譜読み」の効率的な指導法に繋がると考えられる。

また、指導者の指導方法に関しては、前述したように各指導者には指導内容などの指示を伝えていない。各自が銘々に、より効果的と考える助言を学生に与える。これは、ひとつには学生と指導者とのマ

ツチングを、それぞれが探ることによって、相互にミスマッチを防ぎ、より教育的に有効な環境になり得ると考えているからである。さらに、多岐にわたる教育的刺激を準備することによって、学生の興味の糸口がどこかで開かれるという考えが根底にあるからである。指導者によるさまざまな助言は、時には真逆の助言となることもある。しかし学生の意欲を多方面から多角的に刺激することによって、より大きな効果が得られると考えている。今回のトレーニングでも、学生は最も自分に適した方法を、回を重ね且つさまざまな助言の中から知らぬ間に取捨選択を繰り返し、そのうえで理解をし、またその理解を深めることができたと考えている。

以上、多方面に新たな課題が生じる調査となった。今回の調査を継続させつつ、新たな視点も含め、限られた時間の中での効率的な指導法を追求していきたい。

## 5. 謝辞

本研究を進めるにあたり、本学2年生を担当する浅野朱美先生、安藤園子先生、五十君綾子先生、杉山加保里先生、山田佳穂先生には快くご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 藤間渉、中平勝子：読譜視線分析によるピアノ演奏技能獲得過程の記述,第11回情報科学技術フォーラム講演論文集,11-3,559-560 (2012)
- 2) 古谷晋一『ピアニストの脳を科学する 超絶技巧のメカニズム』春秋社,95 (2012)
- 3) 古谷晋一 前掲書,95

## 参考文献

古谷晋一『ピアニストの脳を科学する 超絶技巧のメカニズム』春秋社 (2012)

## 注

- 1) この種の調査は、「カード使用組」と「カード不使用組」を作り、差を見ることが望ましいであろう。しかし、本研究では、学生は被験者である前に学習者であると認識している。

- 2) 調査では、調査対象者に定着している音名ドレミ唱に統一して用いている。